

助教・齋藤 文誉

医学部附属病院 総合周産期母子医療センター

▶ 研究内容

【背景・目的】

腹腔鏡手術は低侵襲であることから飛躍的に普及しつつあり、2018年4月には子宮頸癌に対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術が新たに保険適用となった。一方で、開腹手術との予後がランダム化比較試験で検証され、**腹腔鏡手術群の予後が、開腹手術群よりも劣ることが報告された(図1)**。

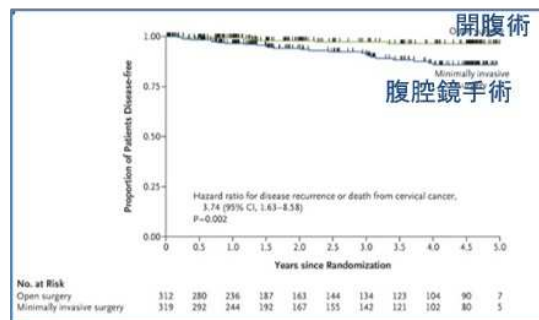


図1. 子宮頸癌における開腹術と腹腔鏡手術の生存曲線

これをもって、子宮頸癌に対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術の施行症例は減少傾向にある。しかし、この試験では、子宮頸癌では通常みられない腹腔内播種で再発する症例等が認められたことから、子宮を腔から切断する際に、腹腔鏡手術で腹腔内に**送気するCO2ガスが病巣の腫瘍細胞の腹腔内への散布・増殖をきたしている**ことが考えられている。

現在は、腹腔鏡操作に先立ち、経腔的に子宮頸部から2-3cmの部位で腔の前後壁を縫合し子宮頸部を包み込むようにして腔カフを形成することで、腫瘍の腹腔内散布を予防する工夫が行われている(図2)。

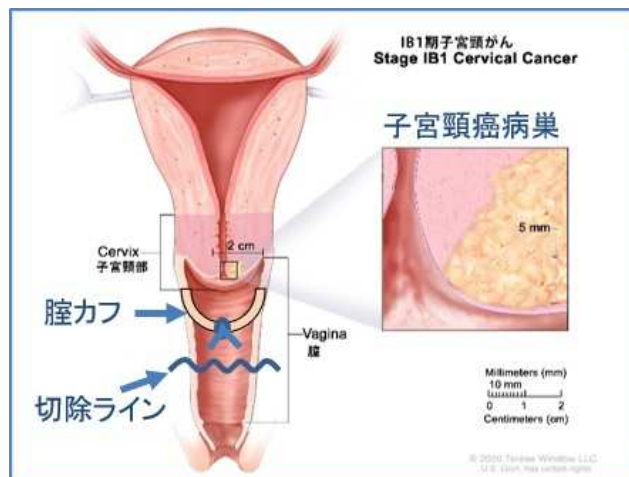
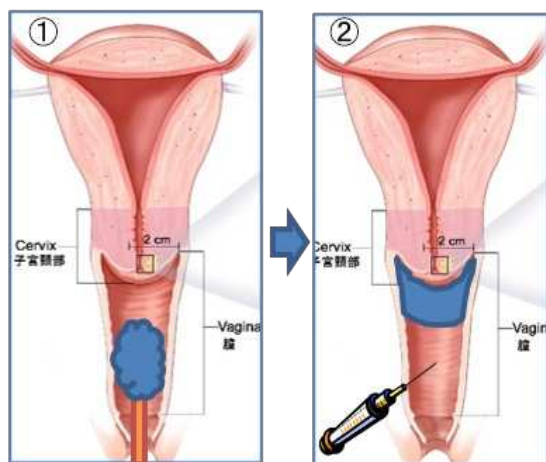


図2. 病巣の腫瘍細胞の腹腔内散布予防のための腔カフ形成

腔カフ形成に代わり、子宮腔部に密着し病巣を密閉できる材質が開発されれば、子宮頸癌治療にとって福音となることが期待できる。

【研究方法】

1. 形状変化性に富み、**吸水性**と**密閉性**の両者を担保できるような素材を経腔的に挿入し子宮頸部を密閉する。
2. 素材が子宮頸部に密着した後、時間をおいて剥落せず腫瘍細胞の漏出がない事を腔内の**洗浄細胞診**で確認する。



本技術が確立されることで、腹腔鏡手術では膣カフ形成に代わり本法が主流となることが考えられる。さらに、開腹術に劣らない予後が期待でき、低侵襲である腹腔鏡手術のさらなる普及によって子宮頸癌診療に寄与できる。

▶ 提供できる技術

開発に関する女性腔内の環境分析 pH, 細菌叢, etc に必要なサンプルの提供

▶ 参考資料

図1. N Engl J Med. 2018;379:1895-1904

▶ キーワード

婦人科腫瘍学 子宮頸癌 腹腔鏡手術 腫瘍散布予防 Gynecologic Oncology Cervical Cancer Laparoscopic Surgery Preventing the spread of ulcers 医歯薬学領域 外科系臨床医学 産婦人科学

《ご連絡先》 コーディネータ 有田 健一 TEL 096-342-3247 FAX:096-342-3247 mail:ke-arita@jimu.kumamoto-u.ac.jp